

非営利セクターで市民性を磨き、

高める『家族』

『家族』の在り方に関わって、この三つの人権と並んで経済の担い手を三つに分ける見方が注目されています。第一の担い手は資本主義成立で本格化した市場等の私的セクターです。営利・利潤追求を第一義の目的にしています。第二のセクターは国・自治体等の公共のセクターです。国民・地域住民へのサービスを第一義の目的としています。第三のセクター（社会セクター）は非営利セクターとも呼ばれています。

「安全・安価・安心」な商品・サービスを求めて集まり職員を雇って流通と消費を自ら担う、全国で一八三〇万世帯（九四年）を組織している日本生活共同組合などが代表的な例です。

アメリカの「非営利セクター」の活動とその役割を概観したL・M・サラモンという学者が、「第三のセクターがなぜ存在するのか」の理由として「一、市場の失敗 二、政府の失敗 三、多面的な価値観と自由 四、連帯をあげ、資本主義市場経済の下でのさらなる『貧困』の内的、外的な広がりによって痛めつけられ

ている私たちにとって、自由な生き方と個性を尊重し合い、多様な価値を認め合う社会経済システムを相互の連帯によって築きあげたいという欲求はかつてなく高まっている」（『家族は進化するか』二五八頁）とのべています。

「第三のセクター」についてはP・F・ドラッカーも家族と共同体の再編という脈絡で、社会セクターのはたす役割を次に述べています。「今日、家族は依然として重要である。それは必需の絆としてはなく、自由な絆、情愛の絆、愛着の絆、敬愛の絆としてである。と同時にかつてのコミュニティは人々が流動性を得たために十分に機能しなくなり、しかも、家族だけではコミュニティとして十分でない。そこで需要となってくるのが社会セクターであり、社会セクターへの参加を通じて人々の「市民性」が磨かれ回復していく。宿命によるコミュニティから意志によるコミュニティへの発展である。その鍵を握るのが「社会セクター」である（前掲書二五九頁）。

『家族』の発展の方向性を考えるひとつの貴重な提起です。